

# 「舌切り雀」とその周辺

—— 児童文学の素材へのアプローチ ——

岡田 美也子

The study of "Shitakiri - suzume" and some sparrows' tale

—— an approach to material of juvenile literature ——

Miyako Okada

## はじめに

近年の国語科教育は、「言語の教育」という点を前面に押し出すようになっていく。

・小学校、中学校及び高等学校を通じて、言語の教育としての立場を一層重視しながら、国語に対する関心を高め、国語を尊重する態度を育てるようにする観点から、……構成する。

(教育課程審議会答申 平成元年改善の基本方針)

この動向は、言語の形式面を重視した教育と受け留められがちで、文章全体における表現内容を疎かにすることへの懸念を生む。

言語の教育とは、言葉の多面性を知り、一語一語にこめられた書き手の意図・考え、音や意味から付加されていたイメージの広がり、受け継がれてきた日本文化などに対する感性を持つことである

と筆者は考える。文学の読みにおいて、鍵となる一語・一素材に着目してその現われ方をみていくことは、内容を理解し、自分の中に取り込む契機を生むであろう。本稿では、そういった観点から翻って、初等教育の教諭を志す人たちが文学の中に子供の心性をみる能力を養う可能性の持つものとして、先の方法を提示したい。

さしあたり、素材として昔話のひとつ「舌切り雀」の「雀」を取り上げる。

理由の一つは、子供と雀の親和性ということである。浜島代志子氏は、読み聞かせの現場での子供の反応を次のように述べている。

・キャラバンの人形劇セットを借りて上演しているグループや保母さんの報告によりますと、子どもたちは、文句なくちゃん(舌切り雀の呼び名―筆者注)派です。ちゃんが、舌を切られた場

面で立ち上がって怒り、憎たらしいおばあさんがやられたら「やったーっ」と、叫びました。

子どもたちは、ちょんに同化しておはなしを聞きます。だから、すべての人物、できごとをちょんの目を通して感じます。おじいさんは、やさしいお父さん、おばあさんは、動物を飼うのを許してくれないガミガミ屋のお母さんかもしれません。家庭によつてはその逆だと感じる子どももいるでしょう。

（『昔ばなしは今ばなし』<sup>(1)</sup>）

弱小であること・可愛らしいことなどが、そのまま子供の性格と通じるといふことはいふまでもあるまい。児童の享受する言語文化の中には、童謡（『雀の学校』）、絵本（『こすすめの冒険』）、詩（新美南吉「雀の歌」、金子みすゞ「雀のかあさん」「雀と芥子」「おはなしのうたーしたきりすずめ」）など、多くの作品に雀が取り上げられている。

さらに、大人としてこの昔話に向かう時には、太宰治『お伽草紙』に「舌切り雀」という作品が存在する。太宰が昔話「舌切り雀」に対し、どのような解釈をした結果この作品が生まれたのか、またそこにはどんな日本の精神文化が表れているのか。「舌切り雀」に対する近代文学からのアプローチが可能である。大方ストーリーを知っている昔話に改めて面と向うことは、大人にとって難しいが、近代文学作品との交錯から捉えてみることによつて、敬遠しがちな昔話に目を向けることができる。

本論は以上の観点から、試みに、雀という素材がどのような意味や文学的喚起力を持っているかを探ったものである。

## 一 昔話における雀の様々

「舌切り雀」は、通常老爺と老婆の対比で描かれる。ある時老爺が雀を拾ってきて可愛がる。ところが、作っておいた糊を雀が食べってしまったため、老婆は雀の舌を抜いてしまう。老爺は、雀を追求めて竹林で雀のお宿を捜し当て、そこで歓待され、宝を持ち帰る。それを見た老婆も宝欲しさに雀の宿を訪ねていくが、粗末な扱いを受け、欲で選んだつづらには蛇や百足などが入っていたため、老婆は襲われる。伝承の中には、宿へ行き着くまでにいくつかの条件――牛の洗い汁を何杯も飲む、針を何本も飲むといったこと――をこなしていかなければならない話型もある。

この昔話における雀の意味について考えてみたい。まず、糊を食べてしまうという部分には、米を食む害鳥という面が出ている。この糊は話によつては、屋根の葺き替えの際出てきた幾筋かの稲の穂の使い道を、老婆が老爺に相談して作ったものである。老婆の怒りは、米を作ることを生業とする農耕民にとっては、正当である。

また、「舌切り雀」には異界訪問譚の要素が指摘されるように、竹林の雀の宿では、雀が人間のように生活し、言葉を話す。雀の擬人化は雀に対する人間の親愛の情の表れであろうが、そこには、異界の生き物として造型する視点も存在する。

そして、テーマに関わる部分、雀が老爺・老婆に各々に対応をする場面であるが、この部分には二つの要素が絡んでいる。一つは人間界における雀の扱いの相違で、もう一つは欲の有無である。老爺・老婆という主人公の設定にこだわると、浜島氏のように、現実的な女性とそうでない男性という一般的な対比と読むことも可能かもしれない。

れない。が、全国に分布する「舌切り雀」で対比されるのは必ずしも男女ではない（老爺・老婆が入れ替わっているものもある）。本来は動物への慈しみの大切さ・欲を抱くことへの戒めが主要なテーマであったと考えるべきであろう。

雀は人間に極めて身近であり、また最も代表的な宝である米と強い関わりを持つているが故に、人間に対する賞罰の判断を行う者に位置付けられているといえる。雀に逢うまでに難題を与えられる型は、試練型と称されるが、他の英雄伝説などにも見られ、その場合、試練を与えるのは、神仏など主人公よりも大きい存在である。

「舌切り雀」同様に、雀が二人の人間の行為に対して賞罰を与える役割をもった昔話に、「腰折れ雀」がある。こちらは、隣同士の老婆の対照となっているのが代表的だ。一方の老婆に、雀が傷の介抱の礼として瓢箪などの種を持つてくる。成長した実からは米などの宝がでてくる。隣の老婆が羨み、同様の機会を得るため自ら雀を傷つけて介抱してやるが、雀が持つてきた種から成った実からは蛇や百足などがでてくる。人が雀を追う「舌切り雀」に対し、雀自身が人間の善悪を判断して福を授け、また禍を運ぶ様は、米の実りを司る穀霊のような印象がより強くなっている。

両話は本来別系統で発達したとされる<sup>(2)</sup>が、動物への慈愛と虐待、欲の有無に対し、雀が賞罰を加える点は共通している。ここには雀が人間の性質を見分ける、いわば神仏に準じる存在として造型されていることがうかがえる。報恩報復は人間の仕打ちにたいしてなされるので、雀は人間の心の鏡ともいえよう。

雀の出てくるその他の昔話について見ておきたい。

「雀の仇討ち」の筋は、いわゆる猿蟹合戦である。卵を蛇などに

喰われた親雀、あるいは親雀が喰われて残された卵から生まれた子雀が、栗・牛糞・白などの協力を得て敵を討つ。これには、「舌切り雀」でみたうち報復の要素が表れている。

小鳥の性質の由来やいわれを語る小鳥前生譚に分類される話には、「雀孝行」と「雀の粗忽」がある。

まず、「雀孝行」は、容貌の汚さと米を喰うことへの理由付けを語る。『日本昔話大成』から茨城県東茨城郡で採話されたものをあげておく。

・釈迦の涅槃に動物がすべて集まる。雀はお菌黒をつけたたまま、ぼろの着物を着て会いにいく。燕はお洒落をして紅白粉をつけて行く。釈迦は、雀には穀物を与えるが燕には与えず、虫けらを食べるといふ<sup>(3)</sup>。

採話地によって、雀と対照的になる美しい鳥は啄木鳥、燕、翡翠などに、契機も親の死に目、釈迦の涅槃などに入れ替わる（例えば、千葉県安房郡では石堂寺の仁王の大病となっている）。

「雀の粗忽」は、「雀孝行」に歩き方の由来が加わる。釈迦（親）の死に目に間に合ったのはよいが、あまりに急いでいて釈迦（親）の頭を蹴ってしまったために、地面を歩くことを許されず、二本の足を揃えて飛ぶことしかできなくなった、というものである。『枕草子』一四四段うつくしきものに「ねず鳴きするにをどりくる」とあるように、雀の歩き方は「おどり」のように見られる。雀踊りといって、編み笠をかぶり、雀の模様の着物を来て奴姿で踊る民間舞踊があり、近世の赤本では「舌切り雀」に雀踊りで老婆をもてなす場面が、

表紙の絵になるほどに人々の関心を呼んでいた。

これら小鳥前生譚では、雀の姿の地味さ・素朴さが誠実さの結果として捉えられている。また動きが粗忽さと結び付けられているが、それもむしろほほえましい。親の許へと急ぐ子として登場することは、雀（ハ小鳥）と子供の近似性を思わせる。雀を観察する人間の眼が親愛の情に満ちていたことが感じられる。

「雀孝行」の舞台設定が釈迦の死に目であることは、あらゆる動物たちが集まった涅槃の様がこの話の形成の素材となっている可能性を示唆する。が、それとは別に、古来鳥は人間の魂の象徴として捉えられ、そのことから葬送場面にはよく登場している。

・雀為「確女」、雉為「哭女」、如「此行定而、日八日夜八夜遊也」

（『古事記』上）

・動「尸拳」極、哭踊無「数」。惻怛之心、痛疾之意、悲哀志瀟氣盛。故祖而踊「之」。所「以動」体安「心下」氣也。婦人不「宜」袒、故發「胸擊」心爵踊、殷殷田田、如「壞墻」然。悲哀痛疾之至也。

（『礼記』問喪第三五）

『古事記』では、天若日子の葬送に鳥が供奉した中に雀がみえる。確をつく女の役を与えられているのは、米との関係であろう。『礼記』

の方には「爵踊」という言葉がみえるが、これは中国漢代の皇帝の葬送儀礼に殯宮で雀が跳ねるに似た足をするような動作があり、それを指した言葉であるという<sup>(4)</sup>。平林章仁氏は、これらのことから

『古事記』の例を「刀や戈を持ち、酒食を捧げ、歌舞を行なつて喪

葬に奉仕し、のちには遊部に編成される人々が、そうした鳥の扮装をして殯に奉仕したことの神話的表現とみられる」としている<sup>(5)</sup>。

古代の人々は、魂を鳥に譬え、亡くなった人の魂を慰撫し、死後の世界へと先導するものと考えたのである。昔話には、そういった像は全くないが、鳥を主人公とする話の当初の語りで意識されていたのは、神仏の世界に直結した原初的な魂の姿ではなかっただろうか。

## 二 御伽草子

南北朝期から江戸初期にかけて大量に作られた、簡単な散文形式の読み物がある。これを、室町時代物語・室町時代小説、近古小説・中世小説などというが、一般には御伽草子と呼んでいる。多くは絵巻の伝統をうけて主に絵草紙の形態を持っている。「上流の婦女童幼の御伽の草子として、それにふさはしい内容をもったものが、必然的に奈良絵本の体裁を備へたものであらう<sup>(6)</sup>。」という見解は、言葉と絵の積極的な補完関係を考慮していない点で、そのまま認めることはできないが、今の絵本の原型的なものと言ってほぼ間違いないだろう。

御伽草子の内容は昔話と共通するものが多い<sup>(7)</sup>。中世の動乱期にあって、武士・僧侶や庶民層の勃興、新興仏教の流布、交通の頻繁による都鄙の交流などによって、民間伝承のようなものが汲み上げられ、文章化される環境ができたためである<sup>(8)</sup>。

その御伽草子には、雀を主人公としたものが多い。四に取り上げる太宰治が昔話に材をとった一連の作品を『お伽草紙』と称していることから、このジャンルに目を向けずにはいられないだろう。

『雀の夕がほ』の粗筋は昔話の「腰折れ雀」の内容である。ほぼ『宇治拾遺物語』第四八話雀報恩の事（同話の性質については後述）と同じ文章で綴られている。ただし文末に、

・さて、かのうばは、つねに物をあわれみて、じひふか、かりしゆへにこそ、すゞめをも、やしなひ、いたはりたるなり  
まして、人には、なさけ、いとふか、りしによりてかみほとけも、おのづからいのらざれども、御めぐみ、まし／＼て、かゝるふしぎも、ありけるなり

とあり、原典より善因善果説の要素が前に押し出されている。

それ以外には、雀の発心譚が多い。例えば、『雀の発心』<sup>(9)</sup>は、次のようである。大和国の雀の小藤太夫婦は最愛の子雀を蛇に喰われてしまい、様々な鳥の弔問を受けるが、これを機縁に出家し、妻は尼ヶ崎の庵室に入り、小藤太は「じゃくあみだぶ」と名乗って高野山に上る。そして諸国を巡った後京の寺社を参拝、最終的には内野の西、二条辺りで庵を結んで往生の本懐をとげる。

主人公を雀としたことに意味があるのは、小藤太が庵を結び、往生の素懷を遂げる最後の箇所、雀の森の地名の由来と、諺「雀百までおどり忘れず」の起源を語る内容があることだ。

・うちの、にし、二でうへんを、はしりいきけるに、……い、にも、あんしつをむすびていたき、こ、ちす……こ、にて、一しやうをくらしける

それよりして、かのもりをば、すゞめの、もりとぞ、申ける

・しかるに、じゃくあみだぶは、おどりねんぶつを、申事をぎやうとして、一しんふらんし申、百さいまでたもちて、りんじう、しやうねんにして、大わうじやうの、そくわいを、とげにけるされば、すゞめは、百になれども、おどると申事は、じゃくあみだぶより、はじまりける。  
(赤本文庫蔵本『雀の発心』)

雀の森は、勸学院・更雀寺の跡地と考えられる。地名の本当の由来を考察することはここではできないが、「勸学院の雀蒙求を囀る」などとの関係もあるうか。また、雀の歩き方からできた「雀百までおどり忘れず」の諺と踊り念仏が無関係であることはいうまでもない。

『勸学院物語』は、やはり「勸学院の雀」の諺と関連づけて語られたもので、これも発心譚である。美濃国勸学院で雀の雛を鳥の九郎次郎、蛇の隼人丞が喰おうとして互いに宗論をして争っていたが、親雀の地頭殿が因果応報の理を説いて、わが子を救う。ところが、今度は猫が子雀を喰おうとしたので、また論争して勝つ。鳥や貝が集まって祝宴を催し、互に狂歌を作ったが、親雀はやがて遁世の心が起り、出家して修行の道に入り極楽往生した（赤本文庫蔵 寛文刊本）。

『蒙求』は、中国古代から南北朝までの有名な人物に関して類似の言行を整理したもので、日本古典文学に与えた影響も大であった。その中に、「楊宝黄雀」といって、黄雀を救った礼に三つの環を授けられ、子孫の繁栄を約束されたことが載っている。『勸学院物語』ではこれを使って鳥の九郎次郎と蛇の隼人丞に殺生をやめるように説く。

・かくのごとく、まひないを、もつてさへ。ものゝいのちをたすくるは、なさけのみちの、ならひにて候に。わが子をたがひに、ころさんと、あらそひ申さるゝ事。なさけなきしだひなり。

『雀の発心』『勸学院物語』共に、擬人化した雀に諺を媒介にして仏教的なイメージを植え付けている。逆にいえば、こうした諺の存在から発心譚を生み出すほどに、雀と仏教との関わりを、人々が感じていたということができるのではないだろうか。

発心物の冒頭部分「子雀が烏や蛇に食われそうになる」は、昔話「雀の仇討ち」の系統を思い起こさせるが、御伽草子における雀は、殺生の罪を説き、仇討ちを虚しいと感じて、仏道へ入るものとして造型されている。その理由の一つには、一に述べたように鳥(▽雀)が魂の象徴となることがあるだろうが、次項に述べるような仏教的なイメージも関わっていると思われる。

### 三 仏教における雀のイメージ

室町期に御伽草子が盛んに書かれる以前、中世の説話集には、仏教における唯識説の解釈・説明に雀が重要な位置を占めている。

十三世紀中ごろの成立かとされる『撰集抄』には次のような説話がある。

・或時、覺尊聖人、なすべき事侍りて、東路に思ひ立ちて、鳴海渦を過ぎ侍りけるに、此僧よりて物乞ひけるを、いかにもうちやりの乞食にしもは侍らずとて、居給へる対座によびすゑけ

れば、露ばかりだにはゝかる気色なく、座に付き侍りぬ。此聖のともものものも、その里の族も、めづらかなるわざかなと思へり。や、もの語りきこえて後、「さても実の法文一言承らん」と聞えけるに、此乞食僧うちわらひて、かく、

なるこそばおのが羽風にゆるがして、心とさわぐむら雀かなとよみ捨て、かくれ去りぬ。聖あへなく覺えて、人をわかつて尋ね侍れど、何方へかいましにけん、跡だになしとぞ。

げに、むら雀のおのが羽風になるこそばゆるがして、なるこゑにさわぐなる様に、心がとにかくに思ひつけ、物を分けおきて、かへりてこれにまどふに侍り。此歌は、唯識を思ひ入りてよめりけるなるべし。<sup>10)</sup>いと貴くぞおぼえ侍る。

(『撰集抄』第五一五・覺尊上人乞食者に対面的事)

心がなにかに付けて、分別を持って判断しようとするために、かえって自分自身で迷いの世界をつくりだしている。それが、あたかも雀が自分の羽の起こす風で鳴子をならしてしまい、それに驚いているようなものである、という。

弘安六年起筆延慶元年以降に脱稿した『沙石集』にも、同様の和歌について仏教語を多用して解釈している。

・鎌倉大臣殿御歌に、

なるこそばをのがは風にまかせつ、心とさわぐむらすめかな

此歌はふかき意の侍るにや。法花には、「諸法從<sup>も</sup>本<sup>もと</sup>、來<sup>こ</sup>、來<sup>きた</sup>」<sup>に</sup>と説き、古人は、「万法本<sup>もと</sup>と閑<sup>しづ</sup>かなり。人自<sup>みづか</sup>常<sup>とこ</sup>寂滅<sup>じやくめつ</sup>相<sup>さう</sup>」<sup>なればなり</sup>

「<sup>いそがし</sup>鬧」と云て、諸法は本より、寂靜涅槃の体にして、生死去來の勞<sup>あう</sup>なきに、一念の迷心により、六塵の妄境を現じ、空<sup>くう</sup>く煩惱業をつくりて、其中に苦患<sup>くげん</sup>をうけて、三悪八難〔の〕よしなき處をみ出し、己<sup>おの</sup>れと、くるしむ事、雀<sup>すずめ</sup>のなることを動<sup>うごかし</sup>て、己<sup>おの</sup>れ驚きさわぐに似たるをや。

〔沙石集〕第五末一八 心ある和歌の事

すべて物事は、静まり返った穏やかな状態が本来の姿（寂靜涅槃）であるのに、ほんの一瞬の迷いにより、六根を通じて身体に入った六境が清浄心を汚す。六塵によつて妄心が生じ、妄心によつて妄境・煩惱が生じて、苦患を受ける。そして地獄・餓鬼・畜生の三悪道と見仏聞法のための八種の障礙を導きだす。それが前掲の和歌に詠み込まれた真意であるという。

こうした中世の仏教説話集の雀観と、御伽草子の関係は、『鴉鷲記』（『鴉鷲合戦物語』の別名）に、この文句が使われていることから明らかであろう。

・情ら思へば、鳴子をば、己が羽風にうごかして、心とさわぐ、むら雀なれや、我と我が身を責め、心を悩す苦の数ず、語らば夜もあけ、日も暮ぬべし、死出の山路の遠ければ、物語り名残り多て、立帰る也、

（『鴉鷲記』 卷下 九

・両方師手分、九月六日合戦、鴉追善、雀懸梓事）

同話は、鳥東市真玄が中嶋の森鷲山城守正素の女に執心すること

から起こった、鳥同士の合戦を描く。登場人物の一人雀は、小藤太と名付けられているので、前掲の『雀の発心』との関係がうかがえる<sup>(1)</sup>。

こうした雀観の形成を探ると、まず次に挙げたような和歌のとらえ方が素地となつていと思われる。

・むれてゐる田中のやどのむら雀わがひくひたにさわぐなるかな

〔堀川百首〕田家 源師時 一五二三

・むれてゐるおのが羽風に波たててこころとさわぐうち千鳥かな

〔北院御室御集〕冬 一〇二

源師時の和歌は、後々の百首歌の基礎となつた堀川百首で詠まれたもので、雀を詠んだ和歌の系譜の中でも先駆的なものである。これが仁和寺御室守覚法親王の千鳥の和歌と合成されて、「心とさわぐ」の語が入ることによつて、自らの羽風に鳴らした鳴子の音に驚く雀が、迷妄の姿のたとえとなる。

一方で仏教の教説における雀としては、『今昔物語集』の取材源ともなつた中国の説話集『法苑珠林』に、解脱しきれない精神を雀に譬えた表現がある。

・又修行道経云。譬如小兒捕得一雀執持令惱。以長縷繫放之飛去。自以為脱。不復遭厄。詣樹池飲自恣安隱。縷盡牽還持弄悩苦。如本無異。修行如是。自惟念言。雖至梵天當還欲界受苦如故。於是頌曰。

譬如有雀繩繫足 適飛縷盡牽復廻

修行如是止梵天 続行欲界不離苦

(『法苑珠林』六六 怨苦篇 雜難部)

修行者が、たとえ一時梵天—宇宙の根源的創造力。個体の究極的原理である「我（アートマン）」との合一が人間存在の究極的目標とされる—に至ったと思っても、欲界とのつながりは断ち切れておらず、そこへ戻って行かざるをえない。それを、長い紐につながれている雀が解き放たれて一時自由になったと感じても紐の長さがつきことになどえている<sup>(12)</sup>。

このように、仏教では本来迷いの象徴である雀は、日本の御伽草子に取り込まれる時には、むしろそうした迷える自我を認識して発心する、聖なるものとしての一面を強くしている。

なお、「舌切り雀」は御伽草子ではなく、文献的には近世の赤本からのようだ。中世と近代の間に横たわる近世の赤本や黒本、黄表紙（『したきれ雀』『兒嘶舌切雀』『大鳥毛庭雀』などと題される）では、仏教的な面が弱められ、例えば、雀の里が遊里のような趣を持つていることなど、時代を反映した、また起伏にとんだ読み物としての改作がなされている<sup>(13)</sup>。このことは、これから触れる近代文学の雀のイメージが中世の精神により多く学んでいることを思わせる。

#### 四 近代文学と雀

さて、近代文学に目を移してみたい。

太宰治は、昭和二十年『お伽草紙』と題し、昔話に材を採った作品を発表した。このころ空襲が激化し、太宰自身も東京都下連雀の家で爆弾にみまわれ、下半身まで土に埋まるという経験をしている。この作品は防空壕で娘に絵本を読んで聞かせながら、頭の中で創られていったものという体裁をとっている。取り上げられている話は、「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」である。太宰には、この他『雀こ』（昭和十年七月『作品』に発表）『雀』（昭和二十一年九月一日『思潮』に発表）といった雀を扱った小品がある。三つはそれぞれ異なった文体で書かれているが、雀への想いには通底するものがあるだろう。

『雀こ』は、西津軽郡に伝わる昔嘶「鳥と椽の実」や弘前の童唄「雀々ほんじよ」、童戯「雀こ欲しい」などを下敷きに創作され（『太宰治全集』1『雀こ』解題）、副題には「井伏鱒二へ。津軽の言葉で。」と記されている。

津軽の子供たちが童戯「雀こ欲しい」<sup>(14)</sup>で遊んでいる。子供らのうち、よろづやの一人あねこタキはいつも最初に欲しいといわれるが、たかまどの坊主このマロサマはいつも最後に残される。

・これ、おらの国の、わらはの遊びごとだおん。かうして一羽一羽雀こ貰るだもし、おしめに一羽のこれば、その雀こ、こんど歌うたはねばなんねのだおん。

——雀、雀、雀こ欲うし。



と分別しねでもわかることどもし、おしめの一羽は泣いても泣いても足えへんでは  
(『雀い』)

子供世界にもある不平等、愛される者とそうでない者との区別を明確化する残酷性を描きだしている。東郷克美氏は「この孤立し、追放されるマロサマに太宰自身の被疎外の心情が託されていることは明白である<sup>(15)</sup>。」とされている。この年太宰は東大を落第し、新聞社の入社試験にも失敗して、鎌倉の八幡宮で縊死自殺をはかり、未遂に終わっている。『雀い』には、自分が選抜されなかったことへの思いが滲んでいるといつてよいだろう。マロサマが太宰の分身であり、津軽弁で語られるならば、雀は太宰にとっての故郷の象徴であるといえる。

それでは、『お伽草紙』『舌切り雀』におけるお爺さんと雀の関係はどのようなものだろうか。

お爺さんは、父母はじめ親戚一同に「病弱の馬鹿の困り者」と称され、「世間的価値がゼロに近い」とされている。こうしたお爺さんが雀に打ち解けていった心情にはどんな像がみえるだろうか。

昔話「舌切り雀」には老爺の雀に対する感情の説明はない。太宰「舌切り雀」は、むしろ『宇治拾遺物語』第四八話雀報恩の事の家刀自と雀の関わり様を思い出させる。同話は、昔話「腰折れ雀」と同じ型の話だが、女の描き方が相当に異なっている。六十斗の女は、雀を介抱することを嘲笑され、家の者から疎外されている風である<sup>(16)</sup>。

雀は、そうした老婆が親愛の情を傾ける唯一の存在であった。お爺さんが役たらずで他の人から疎外状況にある—お爺さんは自らその立場にいる風であるが—ことと通じる<sup>(17)</sup>。

また、中国の詩の場合であるが、

・衆人恥<sup>レ</sup>貧賤<sup>一</sup> 相与尚<sup>レ</sup>膏腴<sup>一</sup> 我情既浩蕩  
所<sup>レ</sup>樂在<sup>二</sup>畋漁<sup>一</sup> 山沢時晦暝 歸<sup>レ</sup>家暫間居  
滿園植<sup>二</sup>葵薔<sup>一</sup> 繞<sup>レ</sup>屋樹<sup>二</sup>桑榆<sup>一</sup> 禽雀知<sup>二</sup>我間<sup>一</sup>  
翔集依<sup>二</sup>我廬<sup>一</sup> 所<sup>レ</sup>願在<sup>二</sup>優游<sup>一</sup> 州縣莫<sup>二</sup>相呼<sup>一</sup>  
日与<sup>二</sup>南山<sup>一</sup>老 兀然傾<sup>二</sup>一壺<sup>一</sup>  
(儲光義「田家雜興」八首『全唐詩』一三七)

のような作品がみえる。儲光義は唐で安祿山が長安を陥れた時、捕らえられて祿山の朝廷に仕えたため、乱平定後嶺南に追いやられてその地で没した。第九、十句は、すなわち鳥だけが自分の心の内を理解して庵に集まる、と読むことができる。雀は、人から疎外された、鬱屈した精神の持ち主の友となるのである。

「舌切り雀」では、お爺さんがお婆さんについての独り言をいっていると、突然雀が人語を発した。お爺さんはそれに驚かなかったのだが、雀の言葉を解することには、次のような先例がある。

・一昔周代<sup>二</sup>公冶長<sup>一</sup>云人有<sup>二</sup>聞<sup>一</sup>鳥鳴<sup>二</sup>五日内<sup>二</sup>大乱可<sup>レ</sup>起<sup>一</sup>云。  
人恠<sup>レ</sup>之果<sup>シテ</sup>乱起。御門今度乱云<sup>二</sup>公冶長業也<sup>一</sup>籠者畢。籠中  
聞<sup>二</sup>雀鳴<sup>一</sup>。三里外<sup>二</sup>商人負<sup>レ</sup>米。荷打<sup>チ</sup>反<sup>シテ</sup>取散。イサヤ行<sup>テ</sup>  
食<sup>ントテ</sup>小鳥飛行也云時。御門遣<sup>レ</sup>人見<sup>レ</sup>之如<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>言。サテハ以  
前<sup>二</sup>乱非<sup>一</sup>公冶長<sup>カ</sup>業<sup>二</sup>云出<sup>レ</sup>籠許<sup>シ</sup>畢<sup>一</sup>。是六根浄証也。

(『法華経鷲林拾葉鈔』法師功德品)

論語の注釈、皇侃『論語義疏』による説話である。公治長は、五日以内に大乱が起ると予言、適中したために乱の首謀者として捉えられた。ところが、牢屋の内では雀の話の聞き、三里先で商人が荷の米をひっくり返したことを知った。それによって公治長が大乱を起こしたのではなく、前以て知ることができた能力をもっていたことが証明されて許された、という。法華經の注釈書である『法華經鷲林拾葉鈔』は、雀の言葉を解した、このことを「六根淨の証」としている。六根清淨とは、人間の迷いとなる六つの根源眼・耳・鼻・舌・身・意がその対象色・声・香・味・触・法に対する執着をたつて淨らかな状態になることをいう。『撰集抄』『沙石集』で六境に惑わされる迷妄の姿を表した雀は、ここでは人間の六根淨を証明する者として登場する。

もちろん「舌切雀」の場合は、お婆さんにも人の声として聞こえているので、お爺さんが雀語を解したというより「雀が人語を發した」のである。が、お婆さんは雀が言葉を話すことを現実として受け入れられなかったのに対し、お爺さんは雀の言葉を何の違和感もなく聞いたのは、彼が世捨人のような姿勢で暮らして、隠者、聖者のようであろうとする人物であることと関係があらう。

「舌切雀」では、お爺さんに、自分は「本当のことを言ふために生まれてきた。」と言わせ、「世の中の人は皆、嘘つきだから、話を交すのがいやになったのさ。みんな、嘘ばかりついている。さうしてさらに恐ろしい事は、その自分の嘘にご自身お氣附きになつてゐない。」と世間の言葉に対する不信を述べさせている。が、雀は、はつきりと爺さんの自己弁護の心理を批判する。「それは怠け者の言ひのがれよ。ちよつと學問なんかすると、誰でもそんな工合に横

着な氣取り方をしてみたくなるものらしいのね。……。」意氣地無しの陰弁慶に限って、よくそんな負け惜しみの氣焰を挙げるものだわ。廃残の御隠居、とでもいふのかしら、あなたのやうなよぼの御老体は、かへらぬ昔の夢を、未來の希望と置きかえて、さうしてご自身を慰めてゐるんだわ。……」

この雀の言葉は、容赦ない。しかし、「カチカチ山」の兎が巧妙に計算された残酷性を持つてゐるのに対し、雀は素直さによつてお爺さんに対してゐる。よつて、お爺さんは平然としてゐる。むしろここにあるのは、内面を暴かれることへの快感ではないか。

自分の内面や理論の説明の難しさは、太宰自身が抱えていた問題であつた。

・慎しなうと思ひながら、つい、下手な感懷を述べた。私の理論はしどろもどろで、自分でも、何を言つてゐるのか、わからない場合が多い。嘘を言つゐる事さへある。だから、氣持の説明は、いやなのだ。何だかどうも、見え透いたまづい虚飾を行つてゐるようで、慚愧赤面するばかりだ。かならず後悔ほぞを噛むと知つてゐながら、興奮するついで、それこそ「廻らぬ舌に鞭打ち鞭打ち」口をとがらせて呶々と支離滅裂の事を言ひ出し、相手の心に輕蔑どころか、憐憫の情をさへ起させてしまふのは、これも私の哀しい宿命の一つらしい。

(『津輕』)

お爺さんが雀の素直な意見に遇つたことから得た、もう何も自分についての説明は必要としないという安堵感、太宰自身が欲していた感覚であつたといえよう。

ところで、『津軽』は『お伽草紙』の前年に執筆され、太宰は取材のため津軽に帰っている。この時幼年期の友人や世話になった人々を訪問し、最後に女中で太宰を育てた越野タケにあう。再会した太宰とタケの様子は次のようである。

・「あらあ。」それだけだった。笑ひもしない。まじめな表情である。……「ここさお坐りになりなせえ。」とたけの傍に坐らせ、たけはそれきり何も言はず、きちんと正座してそのモンベの丸い膝にちゃんと両手を置き、子供たちの走るのを熱心に見てゐる。けれども、私には何の不満もない。まるで、もう、安心してしまつてゐる。足を投げ出して、ほんやり運動会を見て、胸中に一つも思ふ事が無かった。もう、何がどうなつてもいいんだ、といふような無憂無風の情態である。平安とは、こんな気持ちの事をいふのだろうか。もしさうなら、私はこの時、生れてはじめて心の平和を体験したと言つてもよい。

……私も、いつまでも黙つてゐたら、しばらく経つてたけは、まつすぐ運動会を見ながら、肩に波を打たせて深い長い溜息をもらした。たけも平気ではないのだな、と私にはその時はじめてわかつた。でも、やはり黙つてゐた。

この様子は、舌切り雀のお照とお爺さんの再会場面に酷似している。

・お爺さんはその枕元にあぐらをかいて坐つて何も言はず、庭を走り流れる清水を見ている。……

何も言はなくてもよかつた。お爺さんは、幽かに溜息をついた。憂鬱の溜息ではなかつた。お爺さんは、生れてはじめて心の平安を経験したのだ。

そして、幼い修治（太宰）に昔噺を語つて聞かせ、読書を教えたのはこのタケであつた<sup>18)</sup>。昔話の中の雀は、タケという存在と重なる部分が大きかつたであろうことは容易に想像される。また、『お伽草紙』執筆後の後、太宰は原稿料の前借りで妻美知子と子供を連れ、津軽へ帰京した。このことを考えても、太宰にとって雀の世界が魂の故郷となつてゐることがわかる。

東郷氏は、『お伽草紙』全体を母性回帰の衝動を裏付けとして成り立っていると論じ<sup>19)</sup>、さらに越智良二氏は、常の男女の恋愛関係とは異なる「絶対的合一と無限の容認を求める点で」この作品の特色が表れてゐるとされている<sup>20)</sup>。こうした作品の中の、太宰の雀の造型の仕方は、雀を人間の精神の象徴と捉えてきた系譜の一端と捉えることができるのではないだろうか。

さて、ここで近代の作家からもう一人、雀に非常な愛着を示した北原白秋を取り上げたい。

白秋は、詩人・歌人、そして童謡作家として知られるが、その人生のうちには、人妻松下俊子との姦通罪により、投獄され、失意の時を過ごした時期があつた。その頃小田原、麻布と点々として、葛飾に移住したが、この期間は己れを見つめ直す時期であつたといえるだろう。長編散文詩『雀の生活』は、そうした生活の中で書かれたものである。同書は、大正六年から大正八年に書き綴られ、『雀と人間との愛』『雀と人間との相似関係』『雀と人間との詩的關係』『雀

の形態と本質」「雀の神経感覚及性格」「雀の団体生活」「雀の霊覺とその神格」というようなテーマに分けられ、白秋は詳細に雀について論じている。序文は次のようである。

・雀を観る。それは此の「我」自身を観るのである。雀を識る。それは此の「我」自身を識ることである。雀は「我」、「我」は雀、畢竟するに皆一つに外ならぬのだ。

かう思ふと、掌が合はさります、私は。

一箇の此の「我」が、此の忝い大宇宙の一微塵子であると等しく、一箇の雀も矢張りそれに違ひは無い筈です。靈的にも、肉的にも。一箇の雀に此の洪大な大自然の真理と神秘とが包蔵されてゐる、としたならば、無論、其の莊嚴された雀はそれ一箇が、既に立派に此の大自然の生命、若くはその生活力の顕現と見て差支へない筈です。立派な象徴だとも云へます。

雀を、私は観てゐました。絶えず観てゐました。観て、さうして識りました。いやまだ、観つつ識りつつあるのです。識りつつ一々に驚き、一々に愛し、憎しんでゐる此の私は、彼の雀の中に此の私を観、此の私の中に彼の雀を観て、今は全く、恐れ入らずにはゐられなくなりました。

あまりにまざまざとしています。此の事實は。

白秋にとつての雀がどのようなものであつたかは、この序文によく表れているが、少し周辺を見ておきたい。

この雀たちは、白秋の庭にいて書斎に遊びに来るのであつた。麻布の生活について、当時妻であつた章子は次のように記している。

・よく父親の、目くら縞の着物を着ては、二階の書斎につまらなささうに、坐つてゐるのでした。幸に父親の着物は丈も行も合ひましたが、それがどんなにか寂しかった事でありませう。雀はその頃からの永いお友達でありました。

この様子は、太宰の「舌切雀」のお爺さんの姿を髣髴とさせる。

・雀がどこで何を何をしようと、全然無関心の様子をしている。さうして黙つてお勝手から餌を握り持つて来て、ばらりと縁側に撒いてやる。……それから深い溜息をついて、机上に本をひろげた。その書物のペエジを一、二枚繰つて、それからまた、頬杖をついてぼんやり前方を見ながら、……呟いて、幽かに苦笑する。

所在なげな白秋に章子は、「大丈夫ですよ、いよいよ貴方がお困りになつた時は、あの雀達がきつと一粒づつお米を啣えて来ますよ。安心してらつしやい。」と白秋を励ましたという。これは章子自身初版本の末尾文「雀の生活の巻末に」に書いているが、この言葉には、雀の報恩という、昔話に通じる考えがうかがえる。白秋自身は、章子に、

・私と同じに殊勝にも貧に堪へ、寂しさに堪へて、私を大成させる為ばかりに影身に添つてゐてくれました妻を見て、私はかう

申した事がありました。

「あなたには気の毒だね、こんなに貧乏で。」

※妻の記憶では、

「ほんとうに濟まない。あんたにもこれだけの苦勞をさせてゐながら、やつぱり雀にも食べさせなければ可愛そうだから。」

と言っている。章子は、すべてを許し、見守ってくれる存在だったと思われる。

こうした夫婦関係は、「舌切り雀」のお婆さんとお爺さんそれとは表面的には対極にありながら、太宰と美知子の関係には通じるところがある。「舌切り雀」の結末では、お婆さんの死後お爺さんは出世するが、「いや、女房のおかげです。あれには苦勞をかけました。」と言っている。越智氏はこれについて「比較的安定した中期の彼の文学活動を生活面から支えてくれた美知子夫人や長兄達に対する感謝の念を反映してのものであり、一時的な俗世間との宥和を示すもの」とされている。太宰・白秋両者にとつて、妻は精神的な合一を達成することはできずとも自らに従い、見守ってくれる存在、つまりお婆さんと雀を合成した存在——逆にいうと、お婆さんと雀は妻という存在の二面——だったのではないだろうか。

以上のように見てくると、太宰の「雀」観の形成に、白秋の影響はないかとの憶測をしたくなるが、これ以上にここでは論じる材をもたない。

さて、『雀の生活』執筆の時代を経て、白秋は童謡の世界へ積極的に取り組んでいくことになる。もちろん「舌切り雀」「腰折れ雀」を題材とした童謡は、「雀のお宿」「腰折れ雀」「雀さがし」「雀の機織」

など多くある。

童謡の思想を述べた『洗心雑話』は、大正六年から大正八年にかけて『珊瑚礁』に発表された。つまり『雀の生活』とはほぼ平行して書かれたことになる。ここに「草木成仏」の思想が見える<sup>(2)</sup>。

・仏家では草木皆仏性ありと云ふ。……この世の中の森羅万象はみなこの仏心神心を持たぬものは一つとして有る筈がない。さうして一つとしてこの宇宙に漲るふたつとない尊い命のあらはれならぬものはない。人とてもさうである。疑ふ人は玉のやうな童の心に触れたがよい。

「草木成仏」とは、草木のように心を持たないものであつても、心を持つ衆生と同じように仏となる要素をもっているという思想である。

・童の靈は新らしい、いつもぴちぴちしてゐる。……生まれたままである。神心のままである。童の観、聴き、嗅ぎ、触れ、味ひ、心に感ずること、それらは凡て驚きのたねならぬはない。……童のやうに驚く事である。その驚異がきっかけとなつて、初めてこの世の靈驗さを識り、神心を識り、おのれの尊いいのちの本体を識る。さうして詩となり、歌となるのである。

これらの思想は、『雀の生活』を通して得られたものであろう。白秋にとつて、雀は童心回帰の重要な契機であつたと思われる。が、単に子供の心というのではなく、生命の根本に立ち戻つて自然のす

べてのものと交感する心を得る、その契機となったと考えられよう。

## おわりに

まず、雀に関してまとめておきたい。

雀のそのもののイメージとしては、日常的で地味な姿は誠実という正の評価と結びついている。また、各ジャンルに関しては、昔話の雀が農耕民である日本人にとって害を与えたり、福をもたらしたりする役割を持っていた。中世説話集・御伽草子では、仏教的な文脈の中で魂の象徴としての存在になっている。近代文学では、白秋と太宰にみたように、雀が自己省察の契機となると同時に、精神生活への慰謝を与えるものとして現れていた。これらには先に挙げた雀のイメージが根本にあるといっていだらう。児童文学において、雀が多く登場するのは、小さい・可愛いといった表面的な子供との相似性だけでなく、素直さ（故に残酷な場合もある）といった奥底の共通性も関わっていると考えられる。

今回は昔話「舌切り雀」を軸に、古典文学から近代文学まで通時的にみていったが、個々の編者・作者の思想的背景については今後細かく見ていく必要がある。また、今回触れられなかった作家についても考える機会も設けたい。例えば、近年小学校教科書に取り上げられている金子みすゞは、雀を材にした童謡をいくつも残している。それらは彼女独特の世界を持ちながら、また多くの人々の共感を喚ぶ要素をもっている。

さて、以上のように一つの素材に注目することによって、私たちはある物事に関する様々な心性をみることになる。文学を通じて子

供と大人である自己の距離を縮める、そういった過程に、児童文学の素材に徹底的に注目し、共通点・相違点を見ていく作業の意味が確認できたと考ええる。もちろん一つの作品を全体として読み込むことが最も重要なことであるが、キーワード・キーワードなど、一つ一つの要素についてその意味を集中的に考えてみることも必要ではないだろうか。そのことが他の作品へと貪欲に世界を広げていく契機ともなりえるであろう。

## 注

- (1) 国民文庫／現代の教養▽ 大月書店 平2・1。浜島氏は「おはなしキャラバン」という組織を結成し、全国の子供たちに人形劇や紙芝居などでお話を語り聞かせる活動を行っている。
- (2) 柳田国男によれば、「舌切り雀」と「腰折れ雀」の二つは、本来別系統で発達したものである。後者は朝鮮からの輸入話であるのに対して、前者はたまたま拾った者から恩恵をうける点で花咲か爺・桃太郎などに近いという。いわゆる小ざ子譚である。
- (3) 以下昔話については、関敬吾編『日本昔話大成』を参照している。
- (4) 窪添慶文氏「中国の喪葬儀礼」『東アジア世界における日本古代史講座九 東アジアにおける儀礼と国家』学生社 昭57・10
- (5) 『鹿と鳥の文化史——古代日本の儀礼と技術——』白水社 平4・9
- (6) 笹野堅氏「御伽草子攷」『室町時代短篇集』栗田書店 昭10・11
- (7) 徳田和夫氏『お伽草子研究』三弥井書店 昭63・12 第一章第

一篇 二 民間説話とお伽草子 参照。

- (8) 『日本文学史3 中世の文学』有斐閣選書 平元・9 第10章 お伽草子 今西実氏執筆。

- (9) 『雀の発心』は絵巻物として幾つか伝存し、諸本によって『雀の松原』『雀の草子』『小藤太物語』などと記されている。ただし、完本は少なく、詞章にも出入りがある。

- (10) 同様の表現がもう一ヶ所ある。引板(ひた)は鳴子と同じく稲を守るため雀を追いかうものである。

・我等も多百千劫の間、鳥獸と生れて、秋の田のおどろかなる山田守る玄寶僧都の引板のこゑにおどろく、むら雀にても侍りけむ。おのが羽風になることをならして、心とさわぐ鳥、かり田の面に魚をひろふ旅鴈としては、越路の空にも帰りけん。

(同前 第二一八 迎西上人事)

- (11) 市古貞次氏『中世小説の研究』東京大学出版会 昭30・12にご指摘がある。

- (12) 『法句経』『法苑珠林』などに神識を雀に譬える句があり、日本南都六宗の一つ三論宗の教義を説いた書『三論玄義』に引用されている。神識は魂、生命体の精神的究極原理である。

・経云如<sub>下</sub>雀在<sub>二</sub>瓶中<sub>一</sub>。羅穀覆<sub>二</sub>其口<sub>一</sub>。穀穿雀飛去<sub>上</sub>。形壞而神走。

- (13) 服部康子氏「赤本「舌切雀」について」『学芸国語国文学』15 昭54・11、内ヶ崎有里子氏「江戸期昔話絵本「舌切雀」について——「雀の宿」(隠れ里)の変遷——」『口承文芸研究』17 平6・3などに詳しい。

- (14) よく知られたものでいうと、「花いちもんめ」のような遊戯で

あろう。

- (15) 「フォーククロアの変奏——「雀こ」を視座として」『国文学』24 19 昭54・7。氏はそうした「孤立する個の悲しみを昔嘶風のメルヘンの中に溶かし込むことに成功した」と評価されている。

- (16) 三木紀人氏「無名人への眼——「女二人」の物語」『国文学』29 19 昭59・7で詳細に論じられ、「家の中で尊重されておらず、孤立ぎみなのであろう。」とされている。

- (17) 中川聡氏「太宰治「瘤取り」と宇治拾遺物語」『二松学舎大学人文論叢』49 平4・12では、『宇治拾遺物語』第三話鬼に瘤取らるる事が、太宰「瘤取り」の創作の材料となっていることを積極的に認めようとする。

- (18) ・私はたけといふ女中から本を読むことを教えられ二人で様々な本を読み合つた。たけは私の教育に熱心であつた。

(『思い出』)

- (19) 「『お伽草紙』の桃源郷」『日本近代文学』21 昭49・10

- (20) 「太宰治「舌切雀」管見」『愛媛国文と教育』22 平2・12

- (21) この思想の明確な形は三論宗の古蔵に始まり、日本では、天台の本覚思想の中で大きく発展した。

## 引用文献

- 『古事記』『沙石集』 日本古典文学大系  
『宇治拾遺物語』 新日本古典文学大系  
『撰集抄』 小島孝之氏・浅見和彦氏編『撰集抄』桜楓社  
『雀の発心』など御伽草子 『室町物語大成』

『北院御室御集』『堀川百首』 新編国歌大観（歌番号はこれによる。）

『法苑珠林』『三論玄義』 新修大正大藏經

『法華經鷲林拾葉鈔』 日本大藏經 法華部章疏三

『全唐詩』 中国學術名著 粹文堂

『礼記』 新釈漢文大系

『白秋全集』 岩波書店

『太宰治全集』 筑摩書房

引用は一部私意により訂正